

四三二 今にして自ら顧みれば、則ち道德は以つて衆に表見するなく、義理は以つて精を致すなく、而して著述文字の業は、一も以つて後に伝うべきものなし。

今而自顧、則道德無_三以表見_二於衆、義理無_三以致_レ精、而著述文字之業、一無_レ可_三以傳_二乎後_一者_上矣、

【訳】今になってふり返つて見ると、人としての行うべき道を他の人に示すものもなく、人として守る道も詳しく述べることもできない。そして、自分の考えを書物にまとめ後世に伝えていけるようなものもない。

四三三 ああ初心の自ら待つ所、同志の我に期する所、果して是れ如何。而れども成就のかくのごとくに止まるは、是れ吾の惕然として慚愧に勝えざるゆえんなり。 丑六月十八日、録して書生に示す。

嗟乎初心之所_二自待、同志之所_二期_一於我、果是如何、而成就止_三于如此、是吾之所_二以惕然不_レ勝慚愧_一也、 丑六月十八日 録示_二書生_一、

【訳】ああ、初め自分が思っていたこと、同志が私に期待していたことは、果たしてどうなったか。それにしても、成し遂げたことがこの程度に止まっていることが、私は大変恥ずかしい思いがする理由である。

四三四 静は是れ道の体にして、淡は是れ道の味なり。其の事なき所に行う、是れ道の動にして、行雲流水、留礙する所なきは、却つて是れ吾が道の風趣なり。

靜是道之體、而淡是道之味、行_二其所_レ無_レ事、是道之動、而行雲流水、無_レ所留礙、却是吾道之風趣、

【訳】静(動かないこと)は、人の道の本質・本体であり、淡(あつさりとして欲のないこと)は、人の道の味であるように、無理の無い自然の成り行きに任せて行うことが人の道の動きである。雲の動きや水の流れのように、物に応じ事に従つて自然のままで滞らず、止まり遮る所がない、これが、かえつて私の道の味わいである。

四三五 此の心は本我なきなり、本欲なきなり。体の静たるゆえんなり。

此心本無我也、本無欲也、體之所_レ以爲_レ靜也、

【訳】この心には、もともと我などないものだ。もともと欲などないものだ。人としての本質が静である理由である。

四三六 学は名を求むるにあらざるなり、利を営むにあらざるなり、子孫の榮を図るにあらざるなり、将来の果報を期するにあらざるなり。若し一毫の、此の數者を為すの心あれば、則ち終に是れ小人の事にして、学の至れるものにあらざるなり。吾が学豈に亦淡ならずや。

學非求名也、非營利也、非圖_二子孫之榮_一也、非期_二將來之果報_一也、若有一毫爲_二此數者_一之心、則終是_二小人之事_一、而非_二學之至者_一也、吾學豈不_二亦淡_一乎、

【訳】学問するのは、名声を得るためではない、利益を得るためではない、子孫の繁栄を図るためのものではない、将来の幸せを期待するためのものではない。もしわずかも、このような利を得ようとする心があるとすれば、それは小人であり、学びが身についているとは言えない。私が学ぶことは、何と淡（あつさり）として欲がない）であることか。

四三七 「内敬にして外恕ならば、則ち家にありても怨みなく、邦にありても怨みなからん。」「言、忠信にして、行、篤敬ならば、則ち蠻貊の邦といえども行われん。」。此れ孟子のいわゆる「其の事なき所に行るは、禹の、水を行るがごときもの」にあらずや。

内敬而外恕、則在家無怨、在邦無怨、言忠信、行篤敬、則雖_二蠻貊之邦_一行矣、此非_二孟子所謂行_二其所_レ無事_一、如_二禹之行_レ水者_上耶、

【訳】論語に次のようにある。「家においては、自分の行動を慎み、外でも思いやりの態度で礼を尽くせば、家族の中でも怨みを抱かれることはなく、外の人々にも怨み

に思われるようなことはない」「言葉に誠実さがあり、行いに真心がこもっていれば、野蛮な国の人々でさえ指示に従うだろう」。これらのことは、孟子が言っている「禹の水を通したやり方は、すべて無理の無い自然の勢いにまかせて水を引いた」と同じことであろう。

四三八 天下我を知るものあれば、則ち樂しみてこれを行い、我れを知るものなければ、則ち退きてこれを蔵^{かく}る。其のこれを蔵^{かく}るや、澹^{たん}如^{じよ}泊^{はく}如^{じよ}たり。其のこれを行^おうや、翻^{ほん}然^{ぜん}沛^{はい}然^{ぜん}たり。拘束なく留滞^{りゅうてい}なきこと、猶^{なほ}お夫^かの雲と水との風に従^{したが}い地に従^{したが}い、従容^{じようよう}として變化^{へんわ}し、自ら姿態^{おのずか}を成すがごときものなり、丑六月廿七日、録して書生に示す。

天下有^レ知^レ我者、則樂而行之、無^レ知^レ我者、則退而蔵之、其蔵之也、澹如泊如、其行之也、翻然沛然、無^レ拘束、無^レ留滞、猶^レ雲與^レ水之隨風隨^レ地、従容變化、自成^レ姿態者也、

丑六月廿七日録示^二書生、

【訳】この世の中で自分を知ってくれる者があれば、喜んで我が力を發揮し、知る者がなければ人前から退いておとなしくしている。その隠れる様は、欲を捨ててあつさりとしているし、必要とされ行動するときには風に翻る旗のように、勢いよく流れる水のように、行^おうのだ。何事にもとらわれて縛られて滞る事がないということは、雲や水が風に従^{したが}い地に従^{したが}って流れていくように、ゆつたりとおおらかに變化しながら自然にその姿を作^{つく}っていくようなものだ、

四三九 老泉^{ろうせん}の「田樞密^{でんすうみつ}に上^あるの書^{たてまつ}」は、其の意將^{まさ}に此れを以^もつて其の知らるるを求めんとするものなり。

老泉上^二田樞密^一書、其意將^レ以^レ此而求^二其知^一者也、

【訳】老泉の「田樞密に上^あるの書^{たてまつ}」のその思いは、まさにこれを以^もつて自分が知られる事を求めるものである。

四四〇 其の知らるるを求むるを以^もつて主と為すも、始終^あ敢^あえて其の知らるる

を求めざるを以つて説を立つ。反手勢をし、激蕩侵迫、彼をして己を用いざる能わざらしむ。此れぞ是れの文を作る、尤も狡猾の処なり。

以求其知爲主、而始終以不敢求其知立説、反手作勢、激蕩侵迫、使彼不能不用己、此是老蘇作文、尤狡猾之處

【訳】その知られる事が主であるが、あえて知られる事を求めないという立場で、自分の説を立てている。急に筆勢を変え、自分を登用するようにし向けている。これこそ、老泉が文を作るときの悪賢いやり方である。

四四一 彼の「管仲論」「高祖論」のごときは、乃ち又無を以つて有と爲し、影に因りて跡を指し、鍛鍊推鞠して、必ず其の情を索めて然る後已む。譬えば獄吏の囚に於けるがごとく、捶撃斥罵し、首肯して罪に服するを以つて期と爲す。亦同一様の手段なり。

如彼管仲論高祖論、乃又以無爲有、因影指跡、鍛鍊推鞠、必索其情然後已、譬如獄吏之於囚、捶撃斥罵、以首肯服罪爲期、亦同一様手段、

【訳】彼（老泉）が、管仲を政治家として論じた「管仲論」や、漢の高祖劉邦について書いた「高祖論」は、無かつたことを、さも有ったかのように記述して、表に出さなくてもよい、どうでもよいところにまで因縁をつけて悪くけなして、罪を巧みに作り上げ、法に照らして罪を作り上げようとしている。例えばそれは、漢獄吏が囚人を扱うように、鞭打ち、罵倒、辱めなどして罪を認めさせ罪に服させるのを期待するようなものだ。同一様な手口、手段、方法である。

四四二 三蘇に就きてこれを論ずれば、老泉は狡猾、東坡は洒落、穎濱は温淳なり。其の文も亦各其の人となりのごとし。誣うべからざるものあり。

就三蘇論之、老泉狡猾、東坡洒落、穎濱温淳、其文亦各如其爲人、有不可誣者、

【訳】三蘇について論じるなら、老泉は狡猾、東坡は洒脱、穎濱は温厚だ。それぞれの文章もその人となりのとおりだ。それは偽りようなないことである。

四四三 老泉は則ち其の始め極めて練習に苦しむ。東坡は則ち天才縦逸、端倪すべからず。而して穎濱は則ち才と学と皆其の父兄に及ばず、故に其の文自ら平浅に失す。

老泉則其始極苦於練習、東坡則天才縦逸、不可端倪、而穎濱則才與學皆不及其父兄、故其文自失於平浅。

【訳】老泉は最初文章を究めるのに、努力して苦勞した。東坡は天才で、その才能は推しはかる事ができないほどであった。穎濱は、才能と学問は、父や兄には及ばなかった。故にその文章は平凡であった。

四四四 唐宋五六百年、天下の能文の士を精選し、僅かに八個を得たり。而して其の三は一家より出づ。父子兄弟聯翩、其の間にありて愧色あるなし。嗚乎亦盛んなるかな。丑七月七日、録して書生に示す。

唐宗五六百年、精選於天下能文之士、僅得八個、而其三出於一家、父子兄弟聯翩、在其間、無有愧色、嗚乎亦盛矣。

丑七月七日、録示書生。

【訳】唐と宋の時代五六百年、その中の文才有る人を精選するとわずか八人だ（唐宋百家）。そして、そのうち三人は一家より出ている。父、その子の兄弟は、世の中に華々しく飛んでいるようだ。恥じるところはなにもない。すごいことだ。